

曲目紹介 (瀬尾和紀 & 上野真 デュオ・リサイタル)

○ J・S・バッハ：フルート・ソナタ イ長調 BWV. 1032

古くからバッハのフルート作品としては、無伴奏のものを含めて7曲のソナタが知られていました。しかし近年の新バッハ全集では、その中から2曲が偽作としてはずされています。この曲は1736年頃のバッハの自筆楽譜が残されており、バッハの真作に間違いはないのですが、それ以前の幾つかの別の楽器用の筆写譜も存在しており、ケーテン時代の作品からのフルート編曲ではないかと推察されています。第1楽章後半の約46小節が失われており、その部分は補筆完成して演奏されています。全3楽章のトリオ・ソナタ形式で書かれていますが、フルートの扱いはソロ的で協奏曲に近いイメージとなっています。

第1楽章 協奏曲風の楽章です。チェンバロ（又はピアノ）がトゥッテイで始まり、一貫した動きが特徴です。欠落部を復元せず、そのまま欠落のままに演奏することもあります。

第2楽章 フルートとチェンバロ（又はピアノ）が3度・6度で平行して演奏します。

第3楽章 彼のフルート・ソナタ中最大の、255小節にも及ぶ大規模な楽章です。情熱的な動きの楽章です。

○ ベートーヴェン：セレナード ニ長調 Op. 41

この曲は、同じベートーヴェンの「フルート、ヴァイオリン、ヴィオラのためのセレナード Op. 25」をフルートとピアノのために編曲した作品です。Op. 25は珍しい楽器編成であり、おそらくこれら特定の楽器を演奏する貴族などの依頼によるものと考えられています。セレナードに代表される娯楽音楽をモーツァルトのようにベートーヴェンも何曲か作曲していますが、Op. 25もそうした作品の一つで、軽快感の中でとりわけフルートの明るく軽やかな音色が活かされています。この編曲はベートーヴェン自身の手によるものではなく他者によるものですが、ベートーヴェン自身がその編曲を校正し承認していることから、正式に作品番号が与えられています。曲は当時の娯楽音楽に倣ったもので7楽章構成です。

第1楽章 「エントラータ（入り口）」と題されたアレグロの行進曲風

第2楽章 2つのトリオを持つメヌエット 第3楽章 モルト・アレグロの楽章

第4楽章 主題と3つの変奏及びコーダを持つアンダンテの曲 第5楽章 スケルツォ風のアレグロ楽章 第6楽章 コンパクトなアダージョの楽章 第7楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェのロンド楽章

○ モーツァルト：フルート・ソナタ ヘ長調 K. 376

原曲は、「ヴァイオリン・ソナタ第32番ヘ長調K. 376」です。1781年11月に出版された6曲のヴァイオリン・ソナタの第1曲目に当たります。この曲はザルツブルクからウィーンに移住した頃に作曲されたもので、モーツァルト25歳の作品です。3つの楽章から成りますが、ただ一つの歌謡主題をヴァイオリン（ここではフルート）とピアノが繰り返し奏でて、対話をすすめていくような牧歌風の第2楽章がことのほか優美です。

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アンダンテ 第3楽章 ロンド

○ ウェーバー：グラン・デュオ・コンチェルタンテ Op. 48

日本語でいうならば、「大協奏的二重奏曲」。変ロ長調。作曲されたのは1816年ですので、ウェーバー30歳時の作品です。通常は、クラリネットとピアノによる作品ですが、今回はフルートとピアノ版です。3楽章構成による作品です。

ヴィルトゥオーゾ風の幻想曲を示唆しているようにも思えますが、曲の規模や構成は「ソナタ」に近いといえます。両者に高度な技巧が要求される作品です。

第1楽章 アレグロ・コンフォーコ 変ホ長調 第一主題はピアノのスケールで始まり、豊富な楽想が次々に提示されていきます。第二主題は音程の上下の少ないもので、動きの多い第一楽章と対照をなしています。展開部・再現部と型通りに続き、クラリネット（フルート）とピアノの両者が活発に動き続けて締めくくります。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート ハ短調 前後の楽章とは対照的に憂鬱な表情の楽章で、クラリネット（フルート）の劇的な表現力が存分に活用されます。中間部はト長調に転じ、明るい表情を見せます。

第3楽章 ロンド、アレグロ 変ホ長調 華やかな中にユーモアをのぞかせるフィナーレ。穏やかに始まりますが、ロンド主題が繰り返される度にピアノパートが充実していきます。第二エピソードでは、かの「魔弾の射手」を思わせる情熱的な歌が聴かれます。ロンド主題の再現はピアノによって華やかに装飾され、第一エピソードの動機を用いた華麗なコーダで結ばれます。

○フルートについて

フルートは金、銀、洋銀などの金属で造られていますが、本来は木管楽器です。（サクソフォンもそうですね）発生は非常に古く、最初は音孔を指でふさぐ形でしたが、少しずつ進化して行きました。それはキーで音孔をふさぐ形を1キーから8キーと進化させ、1847年にドイツのベームが全ての音孔をカップでふさぐベーム式を考案したのです。それが改良に改良を重ねて現在に至っています。



バロック・フルート（4分割型、復元楽器）



今日の一般的なベーム式フルート